

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「グローバルな視野」の再定義の試み： グローバル教育の視点から

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2024-03-21 キーワード (Ja): グローバル教育, グローバルな視野, テキスト分析 キーワード (En): 作成者: 笠井, 正隆 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/0002000160

「グローバルな視野」の再定義の試み

— グローバル教育の視点から —

笠 井 正 隆

要 旨

グローバル教育は、グローバル社会に適切に対応できる人材育成を目的に「グローバルな視野」を育む教育手法である。2001年に主要文献等を分析して「グローバルな視野」の中心要素として「見方」の認識、異文化学習と異文化間コミュニケーションスキル、地球的相互依存関係、グローバル史、グローバルな問題、そしてグローバル社会への参加の6つにまとめた。しかしながら、2000年代以降の世界やグローバル教育界の変化は、「グローバルな視野」の資質に大きく影響を与えている可能性がある。そこで、本研究では「グローバルな視野」を構成する資質を再定義することとした。日本グローバル教育学会の学術雑誌『グローバル教育』に掲載された論文101編からグローバル教育や関連教育手法の定義を抽出し、定性的コーディング手法とKh-coderを使用して分析した。その結果、6つの中心要素がいまだに重要な資質として定義付けされていることが判明した。

キーワード：グローバル教育／グローバルな視野／テキスト分析

1. はじめに

科学技術や交通機関の発展によって、人やお金などの目に見える物から情報などの目に見えない物までが国境を越えて移動する現象、つまり「グローバル化」が、現代では急速に進行している。このグローバル化の進展に伴い、地球規模による政治、経済、文化、環境、そしてテクノロジーの面での依存関係が強くなり、また地球温暖化、人口増加、そしてテロ行為などの国境を越えたグローバルな問題も深刻となってきた。このような激しく変化し続けているグローバル社会に、適切にかつ責任感を持って参加できる地球市民の育成を目的として「グローバルな視野」を獲得させるグローバル教育が1960年代後半にアメリカで誕生し、以降発展してきた (Anderson, 1979)。当時の研究者や実践者が「グローバルな視野」を構成する多種多様な知識・技術・態度を提唱していたことを受けて、それらを検証し、共通する6つの中心要素にまとめた (Kasai, 2001)。以降、この6つの中心要素を採用して、筆者は20年以上に渡りグローバル教育の研究や実践を行い、一定の成果を収めてきた。しかしながら2000年代以降、

地球規模の相互依存関係の加速度的な進展やMDGsやSDGsなどに示されているグローバルな問題への取り組みでも明らかなように、地球の状況は日々大きく変化してきており、さらにグローバル教育を主導する多様な「アクター」も出現し、それぞれが様々な「グローバルな視野」の資質を提唱している（森田, 2017, p.74）。従って、グローバル教育実践者が各々の提唱・支援する資質を「グローバルな視野」として育成する授業を実践しているのが現状である。小関 (n.d.) は、この多様な資質・能力が存在することに起因する定義の曖昧性がグローバル教育の特性の一つであり、実践の幅を広げる一因となっていると述べている。しかし、これからさらに日本で求められる「グローバルな人材」を養成する授業実践としてグローバル教育を広く普及させるためには、グローバル教育が目的とする資質・能力の定義を今一度明確にする必要があると考える。

そこで、本研究ではグローバル教育で育成すべき「グローバルな視野」の資質を定義し直し、再構築された「グローバルな視野」の資質を育成するグローバル教育の実践を模索することとした。この再定義により、より包括的な「グローバルな視野」を構成する資質を明らかにすることが可能となり、ひいては現在のグローバル社会により適切に対応できる人材を育成する教育の実践が期待できる。

2. 「グローバルな視野」の6つの中心要素とその関係性

Kasai (2001) は、修士論文の中でグローバル教育が育成すべき「グローバルな視野」の資質が広範多岐に提案されていることを受け、その多様な資質から共通する中心的資質を抽出することを試みた。その際、グローバル教育関連の主要文献の中で Robert Hanvey が1976年に出版した著書「An attainable global perspective」で提示された「グローバルな視野」を構成する5つの主要要素（‘State of the Planet’ Awareness, Cross-cultural Awareness, Knowledge of Global Dynamics, Awareness of Human Choices）がグローバル教育実践者の中で最も頻繁に活用されていたことが判明した（Benitez, 2001; Kirkwood, 2001; Merryfield, 1997）。そのため、この5つの要素を基盤的枠組みとして採用し、主に1970年代から1990年代までに出版されたグローバル教育に関する他の主要書籍や論文で提言されている資質を比較検討して、最終的に6つの中心要素にまとめた。その6つの中心要素とは、(1)「見方」の認識、(2) 異文化学習と異文化間コミュニケーションスキル、(3) 地球的相互依存関係、(4) グローバル史、(5) グローバルな問題、(6) グローバル社会への参加であり、それぞれの定義は以下のとおりである。

1. 「見方」の認識 (Perspective Consciousness) (PC) : 各個人は、他者と共有しがたい世界観を持ち、その世界観は常に周りの環境に影響を受けて変化する存在で、個人にはそれぞれ

違った世界観を持っているという考え (Hanvey, 1976, p. 4)

2. 異文化学習 (Cross-cultural Learning) (CL) と異文化間コミュニケーションスキル (Cross-cultural Communication Skills) (CC) : 自・他文化に関する知識、ならびに異なる文化背景を持った人と効果的に交流が行える技術 (Merryfield and Subedi, 2001, p. 286)

3. 地球的相互依存関係 (Global Interdependence) (GD) : 人々や、イベント、また様々な問題に関しての国境を越えた相互の結びつき (Pike and Selby, 1988, p. 63)

4. グローバル史 (Global History) (GH) : 国境を越えた歴史的な結びつき (Anderson, 1979, p. 17)

5. グローバルな問題 (Global Issues) (GI) : 一カ国によって解決を図ることができない長きにわたって続いている問題 (Alger and Harf, 1986, p. 10)

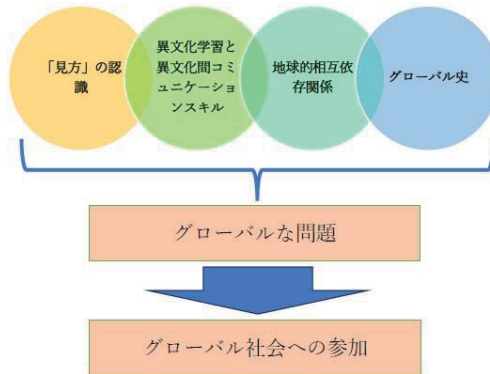
6. グローバル社会への参加 (Participation in a Global Society) (PG) : グローバルな問題解決のための人々の行動 (Alger, 1985, p. 24)

これら6つの「グローバルな視野」の中心要素を効果的かつ効率的に育成する教育手法を構築するために、各中心要素の学修内容を精査した結果、1. 見方の認識、2. 異文化学習と異文化間コミュニケーションスキル、3. 地球的相互依存関係、4. グローバル史、5. グローバルな問題、6. グローバル社会への参加の順序で教育するべきであるとの結論に至った (笠井, 2018)。加えて、これらの中心要素の教育的枠組みを表したものが図1である。この図が示す通り、最初の4つの中心要素はグローバルな問題を学ぶために前もって取得しておくべき資質であり、これら4つの能力要素で培った資質を最大限駆使してグローバルな問題を深く理解し、その問題を解決するための行動を探求して、最終的に行動を実際に起こすことを含むグローバル社会への参加に繋げている。

さらにこの4つの能力要素にはそれぞれの学修内容に重複する部分があり、学びの繋がりを強めている。つまり、「見方」の認識と異文化学習と異文化間コミュニケーションスキルでは、あらゆる情報には情報提供者の視点が含まれており、グローバルな問題を理解するためにはコミュニケーションの手段も活用して様々な情報源から様々な視点からの情報を収集し、その情報をクリティカルに吟味する必要があることを学ぶ。また、異文化学習と異文化間コミュニケーションスキルと地球的相互依存関係では、文化の面で韓流などの外国文化の日本への流入やアニメなどの日本のサブカルチャーの外国への流出傾向などを学んだり、テクノロジーの発展によって世界中の人々とインターネットを介して同期的または非同期的にコミュニケーションを図ることができたりすることを学ぶ。また、地球的相互依存関係とグローバル史では、グローバルな問題が発生してから、国境を越えて世界中にさまざまな影響を与えていることや、その問題を引き起こしたり悪化させたりする原因は国によって多様であることを学ぶ。加えて、

学修者の住む地域でグローバルな問題を深刻にさせている原因に対する改善を図る行動を起こした場合、その影響が学修者の住む場所から国・地域まで波及し、ひいては地球全体の問題解決に影響を与える可能性があることも学ぶ。

図1 「グローバルな視野」中心要素の教育的枠組み



3. データ収集

筆者が2001年に「グローバルな視野」の中心要素をまとめた時に、主に2000年以前に出版された主要文献を参考にしたことを鑑みて、本研究のデータとしては2000年以降に出版された日本グローバル教育学会の学術雑誌『グローバル教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践研究ノート、そして研究ノートを含む計101編を分析対象とした。日本グローバル教育学会は、グローバル教育と関連教育の理論的・実証的研究を推進することを目的に1997年に設立された。また、本学会ではグローバル教育を、「異質と共存し、人類史とともに形成していく精神の開発、自国家・自民族中心の思考・行動を脱し、地球の利益の観点から自覚と責任をもって連帯や協力を求め、問題解決に向かうグローバル・シティズンを育成する教育」と定義付けしている（日本グローバル教育学会，2007，p.1）。魚住（2003）は、グローバル・シティズンシップを、グローバル化により相互依存性を増しつつある世界で、「グローバルな見方やグローバルな価値の実現を重視して意思決定し、時にトランスナショナルな行動の出来る」資質としている（p. 56）。つまり、グローバル教育において「グローバルな視野」育成が主目的の一つとなっている（Anderson, 1979; Becker, 1979; Pike & Selby, 1988）。従って、本学会は『グローバル教育』の学術雑誌で25年に渡り一貫して「グローバルな視野」を育成するグローバル教育や関連教育を基盤とした理論・実践研究を報告していると言える。

4. データ分析法

まず初めに、収集した各論文でグローバル教育や関連教育手法の定義が述べられている箇所を抽出し、その定義文章の中に育成すべき資質が明記されているかを分析した。次に、特定の資質が明記されている定義文章を前述の「グローバルな視野」の6つの中心要素と照らし合わせて、その要素の内容が含まれているかを検証した。なお、同一論文で複数の定義文章などが紹介され、同じ中心要素の内容が複数回提示されていた場合でも、その中心要素は当該論文で1回だけ提示されたものとして算出した。さらに、6つの中心要素が含まれていない定義文章から共通する資質の抽出も試みた。

分析手法は、佐藤（2008）の提唱する定性的コーディング手法を採用し、まず各論文で提示された定義文章から前述の「グローバルな視野」の6つの中心要素に当てはまる内容をコード化した。一例として、2019年の服部圭子氏の論文「グローバル化する地域における外国人日本語支援活動—参加学生の学びを中心に—」では、石森氏が提唱するグローバル教育の目的を参考に育成すべき資質を以下のとおり論じている。

「本稿では、石森（2013）が述べたグローバル教育の目的に倣い、グローバル人材を平和や地球環境の持続可能性（GI）を根底に、地球規模で多角的な視野を持って物事を捉え（PC）、人権や文化の多様性を尊重し（CL）、グローバル社会の一員としての自覚と責任を持って行動し問題解決に取り組もうとする態度およびその技能、知識（PG）を備えたものと捉える。」（p. 35）

服部氏は、グローバル教育が平和構築や持続可能な開発といったグローバルな問題（GI）に関する内容に取り組む際、グローバルな問題を異なる視点（PC）から分析し、異なる文化背景を持った人の多様な価値観や思考（CL）を重んじ、グローバルな問題解決のために行動を起こす（PG）ことができる人材を育成する教育手法であると定義づけしていると分析できる。従って、この定義文章には、6つの中心要素の内、「見方」の認識（PC）、異文化学習（CL）、グローバルな問題（GI）、グローバル社会への参加（PG）の4つが含まれていることとなる。次に、6つの中心要素の内容を含まない定義文章の箇所を、同様の分析手法を用いてコーディングを行った。

最後に、分析対象となった定義文章から日本語で表記された文章のみを抽出¹⁾し、樋口耕一氏によって開発されたテキストマイニングソフトである Kh-coder を使用して、定義文章の中で結びつきの強い語どうしを線で結びつける共起ネットワーク図を作成し「グローバルな視野」を構成する6つの中心要素に関連する語がどのように結びついているのかを検証して、前述の分析結果の妥当性を探った。

5. 分析結果

前述の手法を通して分析した結果をまとめたものが付録1の表となる。この結果によると、まず『グローバル教育』に掲載された論文（計101編）の内、49編（約49%）において育成すべき資質についての言及があった。また、その49編の内、32編（約65%）の論文において教育名称としてグローバル教育（global education 含む）が使われていた。加えて、31編（約63%）において「グローバルな視野」の資質を言及する際に関連書籍・文献を引用または参考に行っていることが判明した。特に、日本語文献では魚住忠久氏の文献が計6編で、英語文献ではWilliard Kniep氏の文献が計4編で引用・参考にされていた。両氏は、それぞれ日本とアメリカのグローバル教育発展に主要な役割を担い、多くの著書や論文を執筆して現在のグローバル教育の礎を築いてきた中心人物である。

次に、「グローバルな視野」の6つの中心要素に照らし合わせて分析した結果、全ての論文で6つの中心要素の内、少なくとも1つ以上の中心要素が述べられていることが判明した。そして各中心要素別では、最も頻繁に言及されていたのがグローバル社会への参加（35編・71%）であり、次いでグローバルな問題（31編・63%）、異文化学習（25編・51%）、「見方」の認識（17編・35%）、異文化間コミュニケーションスキル（13編・27%）と地球的相互依存関係（13編・27%）、そしてグローバル史（7編・14%）の順であった。加えて、6つの中心要素以外の資質が述べられている定義文章を分析した結果、共通していた要素として「情報リテラシー」、「多文化共生力」、さらに「国際協調・協力」（付録1の表の「その他の共通資質」欄にそれぞれ黄色、赤色、緑色で表示）の3つが抽出された。

最後に、日本語だけの定義文章をKh-coderでテキスト分析した結果を、共起ネットワーク図（付録2参照）に表示したところ、6つの中心要素に関連する語として表1に記載されている関連語句の結びつきが頻繁に出現していたことが判明した。この結果から、6つの中心要素が重要な資質として活用されていると結論づけた前述の分析結果の妥当性を高める結果となった。

表1 共起ネットワーク上で頻繁に出現していた関連語一覧

中心要素	共起ネットワークで結びついていた関連語
「見方」の認識	立場、物事、視野、多角
異文化学習	文化、理解
異文化間コミュニケーションスキル	意見、考え、コミュニケーション、能力
地球的相互依存関係	①システム、政治、技術、経済、環境 ②依存、相互、関係
グローバル史	歴史、システム
グローバルな問題	地球、課題
グローバル社会への参加	地球、課題、解決

6. 考察

分析結果で述べた通り、育成すべき資質が述べられていた49編の論文中、65%以上の論文でグローバル教育（global education 含む）の名称が使われていたが、他の論文では国際理解教育や開発教育など他の教育名称が使用されてもいた。この結果は、魚住（1987）の主張であるグローバル教育が他の教育手法の上位概念として位置づけて捉えられている傾向が反映した結果であると考えられる。

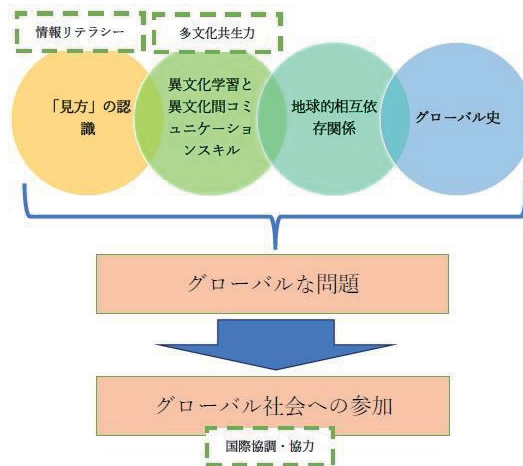
そして、グローバル教育に関する主要書籍や論文を分析して2001年にまとめた6つの中心要素が、2000年代以降でも広く『グローバル教育』の論文で重要な育成すべき資質として提唱されていたことは、グローバル教育の誕生当初からの趣旨が実践者や研究者の中で受け継がれ続けている表れであると推測できる。つまり、グローバル教育の地球的相互依存関係の進展やグローバルな問題の深刻化に対して適切にかつ責任を持って対応することができる人材を育成するという趣旨が変わることなく主目的として認識され続けていると言える。

加えて、日本グローバル教育学会の『グローバル教育』に掲載されていた論文の多くは日本人研究者や実践者によって執筆されたものであるが、いくつかの定義文章の中でアメリカを含めた諸外国の研究者や実践者の文献等を参考・引用していたことを踏まえると、森田（2017）の主張しているように、現在も日本のグローバル教育が諸外国のグローバル教育の理論や実践から多くの影響を受け続けていると考えられる。

また、「グローバルな視野」を形成する6つの中心要素以外で述べられていた共通の資質として、「情報リテラシー」、「多文化共生力」、そして「国際協調・協力」が抽出されたが、これらは学修内容の関連性から、それぞれ「見方」の認識、異文化学習と異文化間コミュニケーション能力、そしてグローバル社会への参加の各中心要素の発展的資質という位置づけで捉えることができる。つまり、「見方」の認識で人は誰しも固有の地球を見る視野・視点を保有しており、その視野・視点に影響を受けた情報が世に出ていることを学んだ後、物事を理解するためには異なる視点・視野を含む多方面からの情報を収集し、その情報をクリティカルに分析する必要があることを学ぶといった情報の受信力や発信力に繋げることができる。そして「多文化共生力」は、異なる文化背景を持った人を認識して受容し（異文化学習）、そのような人々とコミュニケーションを介して（異文化間コミュニケーションスキル）お互いの理解を深め共に生きていくことを模索する力に繋げることができる。さらに、グローバル社会への参加では「地球規模で考え、地域規模で行動する（Think Globally, Act Locally）」の概念を具現化することが主目的であり、一人一人のグローバルな問題に対しての行動に焦点が当てられる傾向にあるが、「国際協調・協力」はそこから同じ行動をする国内・外の人との連携まで広げることができ、国を超えた共通の行動を共に実行することを促すことも可能である。従って、これら3つの資

質を6つの中心要素の関連図に加えると下図のとおりとなる。

図2 更新版「グローバルな視野」中心要素の教育的枠組み



7. おわりに

本研究は、筆者が20年以上も前にグローバル教育で育成すべき「グローバルな視野」の資質を6つの中心要素にまとめたが、2000年代以降の世界の急激な変化や多様なグローバル教育推進者・団体による様々な「グローバルな視野」の資質の出現を踏まえ、本研究において「グローバルな視野」の資質の見直しを行った。結果としては、これまでの6つの中心要素に加えて新しく3つの資質を見出すことで再定義できた。この結果は、筆者がすでにまとめた6つの中心要素が今でも重要な資質として取り入れられていることが明らかとなったが、本研究で採用したデータは日本グローバル教育学会で2000年から2023年までに刊行された学術雑誌『グローバル教育』に掲載されていた論文のみが対象である。従って、他の関連する教育手法の文献等も含めた検証が必要であるが、これは今後の研究課題としたい。また、新しい資質として「情報リテラシー」、「多文化共生力」、そして「国際協調・協力」を抽出できたが、これらは中心要素の発展的資質として位置付けることができたことから、今後は関連中心要素を育成する学修活動の中でこれらの資質の学びをどのように確保できるのかの検討も進める必要がある。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP23K02424の助成を受けたものです。

注

1. 本研究の分析対象論文は、日本語または英語で執筆されており、両言語が混在した定義を Kh-Coder で語と語の繋がりを線でネットワーク表記させるには不適切であると判断し、定義数の多かった日本語の定義文章のみを採用してテキスト分析を行った。

参考文献

(外国語文献)

- Alger, Chadwick F. (1985) 'Think globally and act locally', *Momentum*, 16(4), pp. 22-24.
- Alger, Chadwick F., and Harf, James. E. (1986) 'Global education: Why? For whom? About what?', in Robert E. Freeman (ed.) *Promising practices in global education: A handbook with case studies*. New York: National Council on Foreign Language and International Studies, pp. 1-13.
- Anderson, Lee. (1979) *Schooling for citizenship in a global age: An exploration of the meaning and significance of global education*. Bloomington, IN: Social Studies Development Center.
- Becker, J. M. (Ed.). (1979). *Schooling for a global age*. New York: McGraw-Hill.
- Benitez, H. (2001). Does it really matter how we teach? The socializing effects of a globalized U.S. history curriculum. *Theory and Research in Social Education*, 29(2), 290 - 307.
- Hanvey, Robert. G. (1976) *An attainable global perspective*. Denver: Center for Teaching International Relations.
- Kasai, M. (2001). *Global education: Rationale and theory*. Unpublished master's thesis, The Ohio State University, Columbus, OH.
- Kirkwood, T. F. (2001). Our global age requires global education: Clarifying definitional ambiguities. *The Social Studies*, 92(1), 10-15.
- Merryfield, M. M. (1997). A framework for teacher education in global perspectives. In M. M. Merryfield, E. Jarchow, & S. Pickert (Eds.), *Preparing teachers to teach global perspectives: A handbook for teacher educators* (pp.1 - 24). Thousand Oaks, CA: Corwin Press.
- Merryfield, Merry. M. and Binaya, Subedi. R. (2001) 'Decolonizing the mind for world-centered global education', in Wayne E. Ross. (ed.) *Social studies curriculum: Purposes, problems, and possibilities*. New York: State Univ. of New York Press, pp. 227-290.
- Pike, Graham. and Selby, David. (1988) *Global teacher, global learner*. London: Hodder & Stoughton.

(日本語文献)

- 魚住忠久 (1987). 『グローバル教育の理論と展開』 黎明書房。

- 魚住忠久 (2003). 『グローバル教育の新地平－「グローバル社会」から「グローバル市民社会」へ－』 黎明書房。
- 小関一也 (n.d.) 「グローバル教育の曖昧性と定義」 いばらき地球市民教育ネットワーク
http://www.tokiwa.ac.jp/~oseki/Library/Thesis/Thesis_02.html (2023年12月8日閲覧)。
- 笠井正隆 (2018). 「反転授業の実践と課題：「グローバル教育入門」コースのケース」 研究論集, 107, p. 221-234。
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法』 東京：新曜社。
- 日本グローバル教育学会 (編) (2007). 『グローバル教育の理論と実践』 教育開発研究所。
- 森田真樹 (2017). 「米国社会科教育におけるグローバル教育の展開と課題」 社会科教育論叢, 50, pp. 71-80。

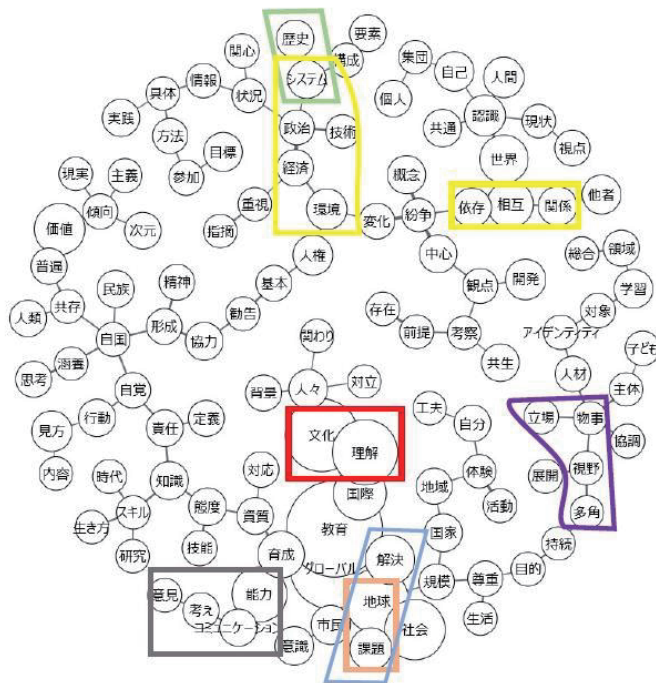
「グローバルな視野」の再定義の試み

付録1. 分析結果表

出版年	著者	キーワード	参考・引用文献の著者・団体名	PC	CL	CC	GD	GH	GI	PG	その他の共通資質
2000	宮原 悟	グローバル教育	魚住忠久							o	
2001	鹿野敬文	グローバル教育	文部科学省検定済教科書 [Polestar English Course II]、佐藤郡衛	o		o		o		o	
	小川彩子	グローバル教育	Tye & Tye		o		o		o		
	大橋直樹	グローバル教育	魚住忠久		o		o			o	
2002	井上星児	国際理解教育			o						
	多田孝志	グローバル時代の学び		o		o				o	多様な他者と創造的な関係性を構築できる力、情報活用、仲間とともに学び、相互啓発、相互批判などをしつつ共生意識をたかめていく 関係理解力、情報の収集、分析力
2005	藤原孝章	グローバル教育	Kniep	o	o	o	o	o	o	o	
	吉村功太郎	国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育、開発教育、グローバル教育							o	o	
2006	郭雯霞	国際理解教育			o				o	o	
2007	Alan D. Lytle	global education			o						
2008	Dale R. Howard	global education	American Council on International Intercultural Education	o	o	o	o	o			
	戸田清子	グローバル教育	W.M.クニーブ		o		o	o	o	o	異なる文化をもつ人々との協働
	Rose Sabanal	global citizenship	Andrezewski	o		o	o		o	o	knowledge and skills pertaining to cooperation, ability to locate information from a variety of sources
2009	近藤茂明	グローバルな見方	ローランド・ケース	o							
	Yoriko Hashizaki, Misato Yamaguchi, Masato Ogawa	global education			o	o	o	o		o	o
	洪美里	国際理解教育	ユネスコ		o		o		o	o	国際的結束と協力の必要性に対する理解
	牛志玲	国際理解教育			o	o	o			o	o
2010	谷口和也	グローバル教育							o		
2011	伊藤静香	国際理解教育	日本ユネスコ国内委員会		o		o		o	o	国際協調・国際協力への実践的態度
2012	鎌田公寿	グローバル教育、グローバルシティズンシップ	魚住忠久							o	
	寺田佳孝	グローバル教育	ジョインプフルークとシュレック		o	o			o	o	
2014	William Robert Stevenson III	global education								o	
	内山知一	グローバル・国際教育							o		
	水野英雄	グローバル教育		o	o				o	o	
	祐岡武志	持続発展教育(ESD)						o	o	o	
2015	石森広美	ワールド・スタディーズ、グローバル教育、グローバルシティズンシップ	Fisher & Hicks, Marshall, Davies; Marshall; Oxfam						o	o	
	石川慎一郎	グローバル人材養成	産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会; 産学連携によるグローバル人材育成推進会議	o	o	o				o	協調性
2015	大山万谷・岩坂泰子	グローバル教育	石森	o	o				o	o	
	藤崎さなえ	グローバル市民、グローバル教育	ユネスコ、クニーブ						o	o	
2016	満都拉	地球市民			o				o		「共生」を求める自立的な市民
2017	鎌田公寿	コスモポリタン・シティズンシップ、コスモポリタンな市民			o		o		o	o	
	井上昌善	開発教育							o	o	
2018	Hiromi Ishimori	global education	Oxfam		o				o	o	
	福村 優	グローバル教育	魚住忠久			o				o	

2019	萩原浩司	グローバル教育	宮崎、深草		o		o	o	o		
	服部圭子	グローバル教育	石森		o	o				o	o
	松尾光雄	多文化共生				o	o				
	中澤純一	グローバル教育								o	o
	杉本孝美	グローバル教育				o				o	
	Hiromi Ishimori	global education	Oxfam; UNESCO								o
2020	李月	多文化共生教育	佐藤、文化庁委託研究		o	o					
	永田浩一・仙石 祐	グローバル教育	日本グローバル教育学会		o						o 異質と共存、連帯や協力
2021	中澤純一	グローバル教育	藤原				o			o	
	大塚 圭	グローバルなもの の見方	Hanvey, Kniep, Case		o	o		o	o	o	o
2022	萩原浩司	グローバル教育	魚住忠久							o	o 連帯と負担の分かち合いを核とした『グローバル・パートナーシップ』の精神
	藤崎さなえ	グローバル教育	シュライヒャー、OECD		o	o				o	o 異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力
2023	東 優也	グローバル教育	藤原、石森		o					o	
	永田浩一・仙石 祐	グローバル教育	日本グローバル教育学会		o						o 異質と共存、連帯や協力
	赫連茹玉	グローバル教育	魚住忠久								o

付録2. 共起ネットワークと中心要素の関連語



- 「見方」の認識
- 異文化学習
- 異文化間コミュニケーションスキル
- 地球的相互依存関係
- グローバル史
- グローバルな問題
- グローバル社会への参加

(かさい・まさたか 短期大学部教授)